ふるさと米子 探検隊

第8号 弓ヶ浜 農業の歴史 の巻　2006年10月3日

編／発行　米子市立図書館
TEL0859-22-2612　FAX0859-22-2637
http://lib.yonago-city.jp/lib/

弓ヶ浜 農業の歴史

私たちは、探検隊第５号「川とくらしの巻」で、毎日の生活のなかでの水の大切さと、より良いくらしをするために、大変な苦労をして自然環境を改良してきた先祖の努力について勉強しました。

探検隊第８号では、昔は「浜の目」とか「夜見半島」という名前で呼ばれた弓ヶ浜の歴史について学びます。弓ヶ浜にくらした昔の人々は、どんな工夫をして、またどんな苦労をして、自然環境を変えてきたのでしょうか。第８号では、特に弓ヶ浜の農作物の変化に注目します。自然の環境や、社会環境の変化のなかで、人々がどんな努力をしてきたのか、その歴史について学びます。

さあ、みんなで探検に出かけましょう。

探検隊の参考資料

図書館には、みんなの探検を助けてくれるたくさんの資料があります。

- 「ふるさと福米のあゆみ」ふるさと福米のあゆみ刊行実行委員会／編・刊　1990　Y224／F4
- 「ふるさと加茂のあゆみ」ふるさと加茂のあゆみ刊行実行委員会／編・刊　1988　Y224／F3
- 「弓浜半島と夜見村」森納／編・刊　1977　Y224／M1-2
- 「新修 大篠津郷土誌」大篠津郷土誌作成委員会／編・刊　2001　Y224／H1-2
- 「かわさき」河崎校区創立二十周年記念事業実行委員会／編・刊　1999　Y224／K10
- 「鳥取県白ねぎ沿革史」鳥取県農業共同組合連合会・鳥取県白ねぎ改良協会　編・刊　1997　Y62／T10-2
- 「新修 米子市史　第5巻 民俗編」米子市史編さん協議会／編　米子市　2000　Y224／Y19
- 「こどもの暮らし今昔」稲村謙一／編　今井書店　1981　Y86／I2
- 「伯耆の民具ごよみ」川上廸彦／著　今井書店　1991　Y08／H1／8

（資料名の後の数字と記号は「請求記号」です（ラベルの番号）。資料の配列場所を示しています。図書館にはこの他にもたくさんの資料があります。）

弓ヶ浜の成立

弓ヶ浜の農業を知るには、弓ヶ浜がどのようにしてできたのか、またその自然環境がどんなものであったか知っておく必要がありそうです。

『出雲国風土記』（733・天平５年）という古い本にはこんなことが書いてあります。「ある日、神様が山の上から出雲国（島根県東部）を見られたら、あんまり小さいので、海に浮かぶ土地を「国来い、国来い」と大山に綱をかけて引っ張られた。出雲国が大きくなったので、神様は綱をそこに置いたまま行ってしまわれた。その綱が弓ヶ浜になった.....」これは出雲神話に出てくる有名な神話です。

本当は、大山が噴火した時の溶岩や、日野川が押し流した砂が長い間に積もってできました。『出雲国風土記』には、弓ヶ浜のことを「夜見島」と書いてあるので、天平の時代には、今の境港から大篠津あたりまでが大きな島だったことがわかります。それが『大山寺縁起絵巻』（1398・応永５年）という本には、陸続きとして描かれていますから、平安時代の頃には、もう半島になっていただろうと言われています。

現在、弓ヶ浜は幅４㎞、長さ20㎞の半島で（正確には砂州といいます）、多くの人が暮らしていますが、昔は人の住めるような環境だったのでしょうか？ 想像してみてください。強い風が吹くとすぐに砂が舞い上がり、冬は吹雪、夏は強い日差しで砂地は焼かれたことでしょう。作物を育てたり生活に必要な水が少なく、砂漠のような土地だったと思われます。

荒地のような土地を、先祖は人が暮らせるような環境につくり変えたのです。例えば海岸の松林。これは強風によって移動する砂を止めるためや、真夏の日差しを防ぐために植えられたものでしょう。現在の何げない風景のなかにも、昔の人の努力のあとをみることができます。

肥料と水

この地で農業をして暮らすためには、どんな物が必要だったのでしょうか。まずは「肥料」と「水」です。砂地には、土と違って作物を育てる栄養分がありません。普通の農地では、昔は緑肥といって草を使ったり、牛馬の糞を肥料に使いました。しかし、弓ヶ浜には草地が少なく、草を食べる牛馬も飼うことができません。あなたならどうしますか？……そこで考えられたのが、海草や魚を肥料に使うことでした。水はどうでしょう。弓ヶ浜の砂地は、地下に水の層があり、浅い井戸で水を得ることができました。それでも稲作をするには充分ではありません。本格的な稲作は、米川の開削が始まってから、弓ヶ浜にひろがっていきました。

このように、暮らしにくい自然環境を、工夫して作り変えたりする一方で、夏の暑さや少ない水と肥料でもよく育つ農作物が選ばれて、耕作されていきました。

弓ヶ浜の農業にはもう一つの大きな特色があります。普通の農村では、主食になる稲作が中心ですが、弓ヶ浜では主食（稲・麦・芋）作物を十分に作ることができませんでした。それで足りない主食分を、お金で買わなければならなかったため、お金に換える作物（換金作物、綿・桑・葉タバコ・ねぎ）をいつも耕作してきたことです。

米と麦

米（稲作）や麦（麦作）は、主食作物ですから、弓ヶ浜のそれぞれの村が開拓され始めた時から、熱心に作られました。

稲作には畑で作る陸稲もありますが、米川が開通して水稲栽培がひろがるまで、あまり普及はしませんでした。

水稲栽培には田が必要です。弓ヶ浜では、次の三つの方法で田が作られました。

①ならし新田　これは土地の低い所に砂山の砂を運んで、ならして作りました。

②あげ新田　これは遠浅の海（中海）の部分に、石垣を築いて囲み、その中に海中の砂を引き上げて作りました。内浜（中海側）の村では、この方法で多くの田が作られました。

③流し新田　これは米川の水が田畑に使われなくなる初冬の頃、砂山の砂を米川に流し込み、水の力で砂を運んで作った田です。水流がゆるいので、村人は川の中に並んで入り、上流から下流へ砂をおだてて（浮かせること）流したそうです。冷たい冬空の下での大変な作業だったようです。

麦作は、水をあまり必要としない冬から春にかけて成長する作物ですから、弓ヶ浜でも多く作られました。11月ごろ種をまき、芽の出るころの12月に根を張らせ、霜柱で根が浮き上がらないように麦踏をして、翌年５・６月に麦刈りをしました。皆さんの先輩は、こう詩いました。

麦刈り（昭和12年）夜見小６年　松本誠一

かんかんと日は高い／刈れ刈れ／ザックザックザック
まっ白い鎌の刃先に／くずされてゆく麦の列／むせるような麦のにおいが
鼻をうつ／父も母も兄も／機械のようにうごいている

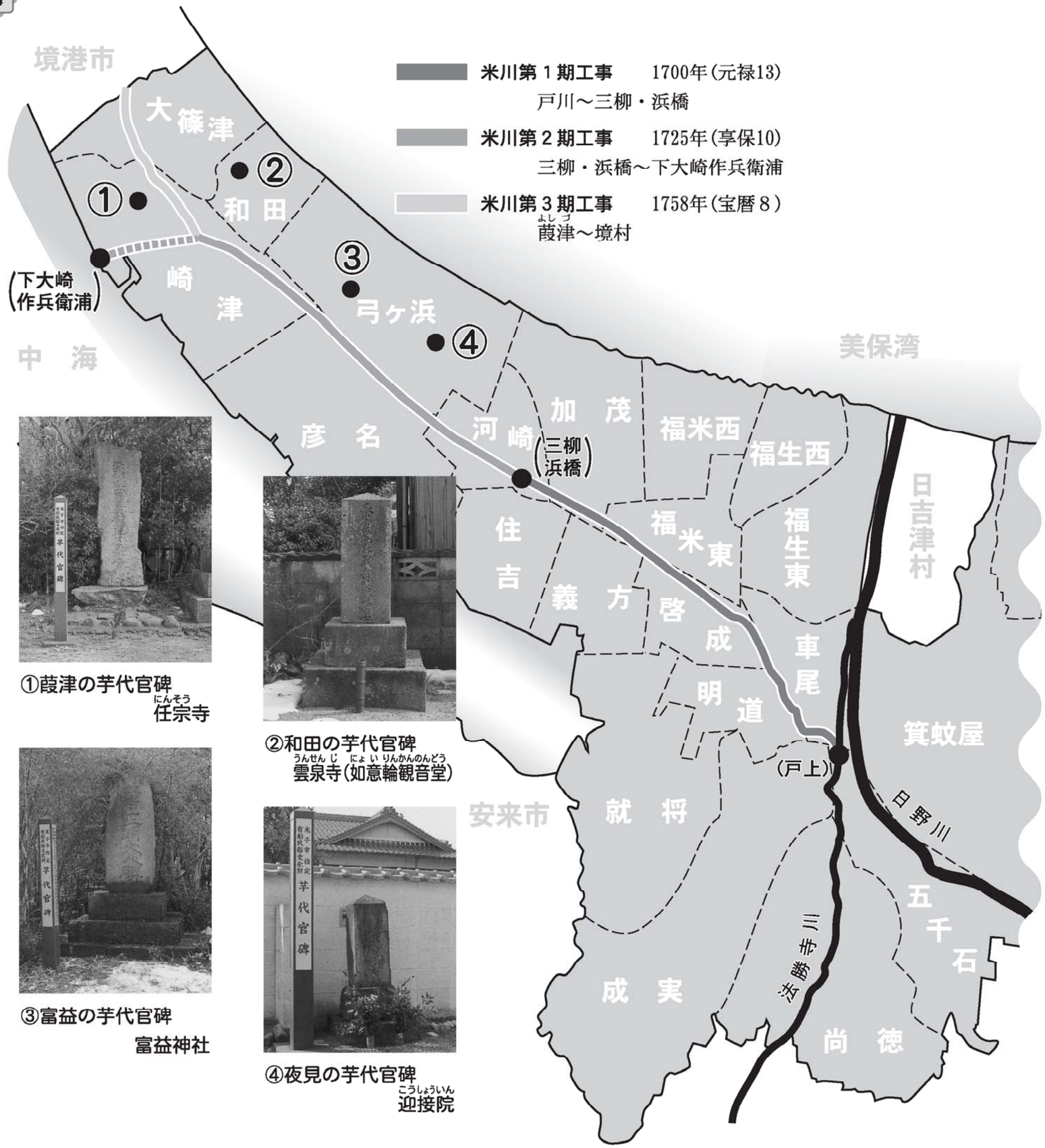
外浜（美保湾側）では大麦が多く作られ、梅雨のころに納屋の中で10人ほどが輪になり、ヤットベェ（木槌）で穂を打って脱穀しました。内浜側は裸麦が多く作られ、これはカラサオ（くるり棒ともいう）を使って脱穀しました。後には麦落し台に叩きつけたり、機械でするようになりましたが、体中がむずがゆくなる重労働だったといいます。

さつま芋

弓ヶ浜には「芋塚さん」と呼ばれる碑が四つあります。これは石見銀山の代官であった井戸平左衛門正明という人に感謝するための碑です。彼は、米麦ができなくて飢え苦しんでいる石見（島根県西部）の人々を救うため、主食の代わりとなる芋を薩摩（鹿児島県）から取り寄せ、多くの人の命を救いました。1732（享保17）年のことです。

弓ヶ浜に芋が入った時期については、1700年代（『樵濯集』）とか、1780（安永９）年、境港の幸次郎という人による（『境港沿革史』）とか、はっきりしませんが、芋は弓ヶ浜の人々の命を守ってくれた貴重な作物でした。

さつま芋は暖かい土地にできる作物で、水はあまりいらず、砂地に適した作物でした。芋はそのまま煮て食べたり、芋あめ、芋だんご、芋がゆ、焼き芋、芋菓子、芋酒など、さまざまに加工してたべました。



①葭津の芋代官碑
任宗寺

②和田の芋代官碑
雲泉寺（如意輪観音堂）

③富益の芋代官碑
富益神社

④夜見の芋代官碑
迎接院

弓浜かすり

６ページの「綿作り」の解説にもある通り、江戸時代の中ごろに、境港を通じて綿作が伝えられてから、弓ヶ浜の農家は、綿作にはげんできました。江戸の終わり頃には「伯州綿」といえば全国的に有名なものでした。

「弓浜かすり」は、「浜がすり」ともいわれ、もともと農家の主婦が自家用の衣類として、家族の晴れ着から仕事着、また蒲団地として織り上げたものでした。織り込まれた模様には、家族の幸を祈って、さまざまな形が工夫されました。

＜綿つみ＞から＜木綿糸＞を作るまでも大変ですが、＜横糸＞を染め分けたかすり糸を、１枚の布に織り上げるのは、複雑な工程のある大変な作業でした。（米子では＜綿つみ＞のことを＜綿もり＞ともいったようです。）

綿作り

綿はもともと熱帯地方の植物で、高温や日照りには強く、水も少なくて育つので、芋と同様に弓ヶ浜の自然環境に適した作物でした。

綿が弓ヶ浜に入ってきたのは、1676（延宝４）年、備中国（岡山県）玉島港から、境港の新兵衛という人を通じて、と言われています。

綿作は、あっという間に弓ヶ浜一帯にひろがりました。そして江戸時代から明治時代にかけて、全国に名の知られた「伯州綿」の大生産地となりました。

綿作りは、綿花から綿や木綿糸、弓浜かすりなどの綿布を作りました。また、綿の種を絞って綿実油をとったり、収穫した後の茎を燃料に使ったりしました。

綿は４・５月に種をまき、肥料をやり、お盆のころには朝の３時ごろから起きて、一日に３・４回も水やりをしなければなりませんでした。これは大変な重労働でした。あちこちに綿井戸という小さな池が掘ってあり、そこにたまった水を「水汲みタゴ」という底に穴をあけた桶に汲み（汲む時は、タンポのついた棒でふさぐ）、畑に運ぶと桶の棒を抜いて水をやりました。10・11月ごろが収穫です。この時は、出雲・石見地方（島根県）からも、大勢の人を頼んで収穫しました。

明治20年代に外国産の安い綿が輸入されだすと、国内産の綿はしだいに売れなくなりました。

桑作り

綿作りが衰えると、代って換金作物として登場したのが桑作りです。桑の葉を食べて成長する蚕を飼い、蚕に絹糸になる繭玉を作らせ、それを売りました。養蚕といいます。

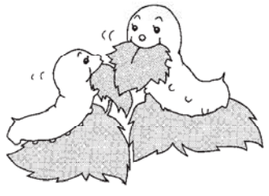
明治時代の初めから、養蚕は日本中の農村で副業として始まりました。弓ヶ浜の養蚕は、副業としてではなく、本業として真剣に取り組まれたことが大きな特徴です。明治20～30年代に、桑畑がだんだん増えていきました。せっかく苦労して作った田に砂を入れ、桑畑にする人も現れました。「良田つぶして桑植えて、末は食う気か食わぬ気か（桑抜きか）」と、ひやかしの歌まで唄われるほどでした。

養蚕も、桑の葉の質や量、蚕室の温度調節など、むずかしい作業工程がたくさんありました。しかも桑葉摘みの最盛期は、田植えや麦刈りなどの春の農繁期と重なったので、農家は家族全員が、昼も夜も休むことなく働き通したものでした。

先輩の書いた桑摘みの作文です。

桑摘み（昭和７年）愛労小学校（大篠津）５年　森本恭二

ぶつぶつぶつぶつ、と桑をつむ音がする。僕のせいの二倍もあるような桑に跳びついて、四・五人の男や女の人達が機械のように手を動かしてつんでいる。桑は次第しだいにぼうずになって来る。何処からか男の元気な力のこもった歌声が聞えてくる。それにまじって女のきれいなやさしい歌声も聞える。



そのうちに日はだんだん暮れて来る。午後七時ごろにはすっかり済んだ。（後略）

昭和30年代になると、安くて強い人口繊維（ナイロンなど）がはやりだし、絹糸の値段が大きく下りました。そのため、桑作りも魅力のないものになってしまいました。

桑畑のあとの換金作物として、何を作るのかが問題になりました。キャベツやスイカなどがためしに栽培されましたが、うまくいきませんでした。最後に残ったのが、葉タバコとねぎ作りでした。

葉タバコ作り

葉タバコは明治時代から作られていましたが、栽培が盛んになりだしたのは昭和20～30年代からでした。

しかし葉タバコは国の監督のもとに作るので（専売制）、少し窮屈なこともありました。反対に ① 国の買上げ値段が、気候によって変わらない。② 災害にあえば、その分だけの補償がもらえる。③ 買上げ予定額の20％を前金でもらえる。④ 種子はただでもらえる。⑤ 葉タバコ運送代がもらえる。など、他の作物より、ずっと有利な点もたくさんありました。そこで多くの農家が、桑畑の代わりに、葉タバコ作り始めました。そのころの桑作りでは、反当たり１万円の利益が出るかどうか、といわれていました。葉タバコ作りなら、間違いなく反当たり、３～５万円の収入になったといいます。

養蚕農家と葉タバコ農家が、入り交じっていたころのこと、桑畑の隣に葉タバコが作られることもありました。その時、葉タバコに含まれる毒（ニコチン）が桑の葉に移り、その葉を食べた蚕が死ぬ例があり、養蚕農家と葉タバコ農家が対立したことがありました。この時には、両方の農家から代表が出て話合い、桑畑から少し離れた所に葉タバコを植える約束をして、解決したのだそうです。

ねぎ作り

桑畑の後に続く作物としていろいろ試された結果、葉タバコと同じくねぎ作りが残ったのにも、いくつか理由がありました。① 買上げ値段が安定していること。② ねぎの根の皮はぎ、荷造りなどが、農繁期の女性の仕事として良かったこと、などの理由で人気が出て、多くの農家で作られるようになりました。

ねぎもまた弓ヶ浜の砂地に適した作物で、昭和時代の初めから、少しずつ栽培されてきました。当時旗ヶ崎にあった農業試験場や、熱心な農家の人たちが、品種改良を重ねて、「伯州一本ねぎ」とか「伯州白ねぎ」という、甘くて、やわらかく、白と緑の色のあざやかなねぎが生まれました。現在では弓ヶ浜農家の代表的農作物として、春夏秋冬いつでも収穫でき、いつでも日本全国へ出荷できる、すぐれた農作物となっています。

探してみよう！　訪ねてみよう！

○アジア博物館・井上靖記念館

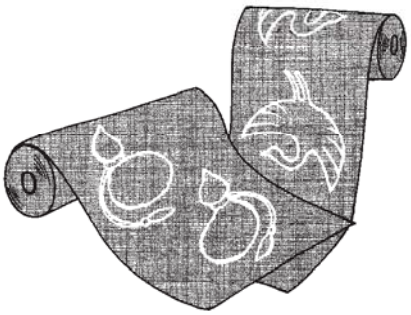
米子市大篠津町57番地

TEL 0859-25-1251

入場料　大人800円　小・中学生300円

年中無休

※井上靖記念館の中にある絣館では、「弓浜かすり」「浜かすり」として有名だった弓ヶ浜地方のかすり文化について学ぶことができます。かすり織りの各工程の展示や、環日本海諸国の織物、民芸品などの陳列もあります。



○弓浜がすり伝承館

境港市麦垣町86番地

（問合せ先／鳥取県産業技術センター　TEL 0859-37-1811）

入場料無料

火曜日と金曜日だけ開館しています

（年末年始と祝日はお休み）

※弓浜がすり伝承館では実際に活動中のかすり織りの道具や、染色設備をみることが出来ます。弓浜絣教室の修了生で結成された「浜絣あいの会」の活動の場でもあります。現在の弓浜絣製品も多数展示してあります。

○米川土手をサイクリングしてみよう！

※米川土手はサイクリングにちょうど良い道路です。土手道を走って、米川と集落の関係、米川と農地の関係を調べてみよう。

○芋塚ツアーに挑戦してみよう！

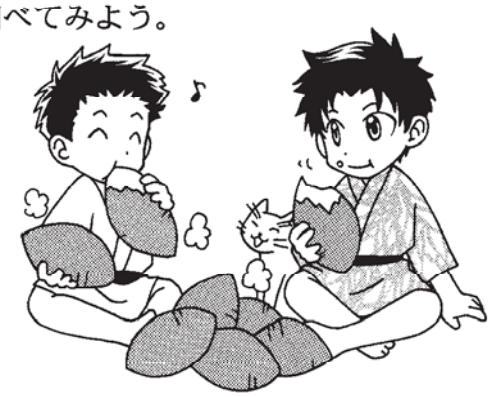
1）任宗寺　米子市葭津255-21番地

2）雲泉寺　如意輪観音堂　米子市和田2571番地

3）富益神社　米子市富益1912番地

4）迎接院　米子市夜見町1606番地

※芋塚さんの石碑に刻んである文字を調べてみよう。いつ、誰が建てたのか調べてみよう。



（イラストは難波康子さん）